

博物館と学校の連携による探究学習のカリキュラムの創造
—「清水寺参詣曼荼羅」を活用した地域学習の実践—

平島和雄・齋藤和希・西山剛・樋口とみ子

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要 第8号

令和8年(2026)3月

博物館と学校の連携による探究学習のカリキュラムの創造

—「清水寺参詣曼荼羅」を活用した地域学習の実践—

平島和雄¹・齋藤和希²・西山剛³・樋口とみ子⁴

(1: 元京都教育大学附属京都小中学校・京都市立開晴小中学校・2: 京都市立開晴小中学校・3: 京都文化博物館・4: 京都教育大学)

Creating a curriculum for Inquiry-Based Learning Through Museum-School Collaboration:
A Practical Approach to Regional Education Utilizing the “Kiyomizu-dera Sankeimandara”

Kazuo HIRASHIMA, Kazuki SAITO, Tsuyoshi NISHIYAMA, Tomiko HIGUCHI

2025年9月29日受理

抄録：本研究では、博物館と学校が連携し、地域の文化財「清水寺参詣曼荼羅」を生かした授業実践に取り組んだ。具体的には、曼荼羅を読み解くことを通して子どもたちが住んでいる地域の過去に思いを馳せるとともに、あらためて現在を見つめながら、まちの未来を創造していこうとする探究学習を行った。これにより、子どもたちの探究学習にどのような広がりや深まりが生まれるのかを検討するとともに、まちの過去・現在・未来をつなぐプランをつくりだすという地域学習のカリキュラムモデルを提示し、他学年や他地域への応用可能性を提案することをめざした。

キーワード：博学連携、探究学習、地域学習、教科横断

I. はじめに

1. 研究の背景と目的

現行の小学校学習指導要領（2017年版）では、子どもが自ら課題を見つけ、その解決に向けて主体的に取り組む「探究的な学習」の充実が求められている。とりわけ、「総合的な学習の時間」においては、「探究的な学習」を行うことが重視されている。具体的な探究の過程としては、課題を設定し、情報を集め、整理・分析したうえで、まとめ・発表し、そのなかでまた新たな課題を設定し、さらなる課題の解決をめざしていくという、問題解決的な活動が発展的に繰り返されるスパイラルな流れが重視される。小学校学習指導要領解説（総合的な学習の時間編）（2017年版）によれば、「要するに、探究的な学習とは物事の本質を探ってみ極めようとする一連の知的営みのことである」と指摘されている。

こうした「探究的な学習」（以下、探究学習）における具体的な探究課題（テーマ）として近年注目を浴びているものの一つに、SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）がある。国連が関わって策定・推進されているSDGsにおいては、国際社会全体を視野に入れた地球規模でこれからの世界が達成すべき17の目標が設定されている。SDGsを、よりわかりやすい言葉にすると、「地球とそこに住む人々が、将来にわたって幸せに暮らせるようにするための世界共通の目標」といえる。

ただし、いきなり地球規模で考えるということは、小学校の子どもにとって規模や範囲が大きすぎてイメージしにくいことも予想される。そのため、テーマ設定において、まずは自分たちの住んでいる校区・地域に焦点をあてることにより、子どもはイメージしやすくなるだけでなく、自分ごととして捉えやすくなるとも考えられる。「総合的な学習の時間」においては、たとえば「地域の人々の暮らし、伝統と文化など地域や学校の特色に応じた課題」を取り上げることなどが学習指導要領のなかで示されており、子どもが自分たちの暮らす地域を対象として、その特色や課題、地域社会との関わりを考えていくという地域学習も重視されている。

本研究で取り上げる実践校は京都市東山区に位置し、世界遺産にも登録された音羽山清水寺を校区に有している。今に至る長い歴史のなかで地域住民は清水寺と深く関わってきた。そこで、校区のなかでも清水寺を取り上げて、SDGsの実現を視野に入れた「総合的な学習の時間」の取り組みを進めようと考えた。

その際、注目したのが、清水寺への参詣の風景を描いた「清水寺参詣曼荼羅（きよみずでら・さんけい・まん

だら)」である。「清水寺参詣曼荼羅」は、中世の清水寺周辺で暮らす人々の生活や訪れる人々の様子を含めて、当時のまちのにぎわいを視覚的に表現した絵画である。この曼荼羅は、子どもが自分たちの住んでいる地域の過去に思いを馳せるとともに、あらためて現在を見つめながら、未来を創造していこうとする探究学習を支える教材として大きな可能性があるのではないだろうか。

なお、「清水寺参詣曼荼羅」に関する専門的な知見を有する機関の一つに、京都文化博物館がある。京都文化博物館は、京都の歴史や美術工芸等、文化全体を総合的に紹介する博物館である。一般に、博物館は、文化財を保管・展示する機関として豊富な資料と専門的な知見を有しており、学校における地域学習を深める上で有効な学習資源となる。そのため、学習指導要領のなかでも、「総合的な学習の時間」において、「学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などの工夫を行うこと」が推奨されている。しかしながら、これまでの「博物館と学校との連携」（以下、博学連携）は、展示品の見学や単発的な出前授業にとどまることも多く、継続的・持続的な探究学習を協働でつくりあげていくようなカリキュラムの構築は十分に進んでいないのが現状である。

本研究では、京都市東山区にある公立小学校の4年生を対象に、次の2点を研究の目的として、地域の文化財「清水寺参詣曼荼羅」を活用した探究学習のカリキュラムを京都文化博物館と連携して創造することをめざした。

(1)博学連携によって、子どもの探究学習にどのような広がりや深まりが生まれるのかを検討すること。

(2)博学連携による地域学習のカリキュラムモデルを提示し、他学年や他地域への応用可能性を提案すること。

2. 研究の意義

博学連携については、さまざまな先行研究がある。小笠原（2005）によれば、そもそも博学連携が叫ばれるようになったきっかけには、2002（平成14）年度からの「総合的な学習の時間」の本格的導入や「週5日制」の実施が関係している。従来の「学校教育に閉じ込められがちであった学びの場を広げる一つの可能性」として、「博物館への期待が高まって」きたというわけである（p. 281）。ただし、博物館と学校が「互いの壁を乗り越えて連携していく」ためには、「双方の人的努力とそれを支援する予算的措置」をはじめとして「まだまだ大きな壁が存在している」と指摘されている（pp. 282-284）。

その壁は、「総合的な学習の時間」の本格的導入から20年以上経過した現在でも、決してなくなったわけではないようである。田尻（2016）や日名地・深谷（2022）は、博物館側からの調査として「日本の博物館総合調査」を取り上げ、博学連携の現状と課題を整理している。これらの先行研究によれば、授業や遠足・修学旅行等、学校行事の一環による子どもたちの来館や、博物館における教育プログラムの作成は少しずつ進んできているものの、課題として、「学校と博物館の連携が両者の双方向的な取組みに発展しないこと」（田尻, 2016, pp. 13-14）や、「博物館と学校の協働的な取組みは推奨されているのに対し、実践が行われていない」こと（日名地・深谷, 2022, p. 83）などが指摘されている〔傍点は引用者〕。一方、学校側からは、博物館の学芸員による出前授業や体験講座の開催に加え（山崎・内田, 2002）、博物館や資料館の有する資料を活用して「地域の歴史を掘り起こし、教材化する」実践が展開されているものの（橋本・山下, 2022）、連携にかかわる双方の「苦労や茫漠感」を低減させる必要があるとして、「教員と学芸員との協働のためには、総合性を導ける機関や人材を組み入れた連携ネットワークの形成が重要」になるという指摘もなされている（阿部, 2024）〔傍点は引用者〕。

そこで、本研究では、博物館と学校とが「双方向的」に「協働」することにより、どのような教育実践をつくりだすことができるのか、さらに、そうした実践を通して子どもたちの探究学習にどのような広がりや深まりが生まれるのかを明らかにする。そのためのアプローチとして、まず、地域の文化財「清水寺参詣曼荼羅」の教育的価値を検討する。次に、博学連携による具体的な実践のなかでカリキュラムをつくりだしていったプロセスを概観する。その後、子どもたちの様子や作品をもとに探究学習の成果と課題について考察する。

Ⅱ. 「清水寺参詣曼荼羅」とその教育的価値

1. 「清水寺参詣曼荼羅」とは何か

「清水寺参詣曼荼羅」とは、参詣人でにぎわう寺社の様子を図示した社寺参詣曼荼羅という絵画ジャンルのひとつである。このような参詣曼荼羅は各寺社に縁をもった勧進僧らによって小さく折りたたまれて持ち運ばれ、

絵解き（絵巻や掛幅を読みときながらその聖域や教義などを解説する方法）や勧進の道具として活用された。

「清水寺参詣曼荼羅」は現存するものとして2点が知られており、16世紀半ばに成立した清水寺所蔵本およびこれよりやや下がる時代に成立したとみられる中島家本と通称される個人蔵本がそれである。画面にたなびく雲霞の表現や日月の有無、あるいは若干の人物描写などに相違点は見られるが、左右上下を東西南北として配置させた画面構成や描かれた諸施設の多くは共通しており、同一時代、同一目的に利用されたものであることは明らかである。これまで美術史、歴史学の格好の分析対象となり、多くの研究が蓄積されている。

とくに下坂守（1993）は、清水寺所蔵本を素材とし、現地比定および文献史料の博搜によって描かれた諸事象の把握を試みている。これにより、当該作品の空間構成はほぼ確定されており、絵画史料としての価値を揺るぎないものとしている。

2. 地域資料としての活用可能性

今ここで下坂の研究によりながら全体の読み解き図を提示する（図1）。画面左下の二つの橋は、五条橋とその中洲にあった大黒堂（①～④）。五条橋にはこの他、牛若丸と弁慶が描かれており目をひかれる。さらに右手、茶店などで賑わう清水坂をつづら折りに進むと、多数の堂舎が並ぶ本堂周辺に至る。子安の塔（⑭）、仁王門（⑮）、春日社（⑯）など、これらの中には今も現地に残る名所が確認されるのが重要である。寺域には堂舎のほか、塔婆や石塔といった信仰物も詳細に示される。右下の木橋を渡る弓を持った人物は、清水寺創建に関わった坂上田村麻呂による狩猟説話を暗示するモチーフである（⑳）。このように本図には単に現実の境内風景の説明のみならず、寺や土地にまつわる物語も多く織り交ぜられた。そこには参詣曼荼羅の祖型となった中世以来の掛幅縁起絵、寺社曼荼羅の礼拝・語りの機能が維持されていることが窺われる。

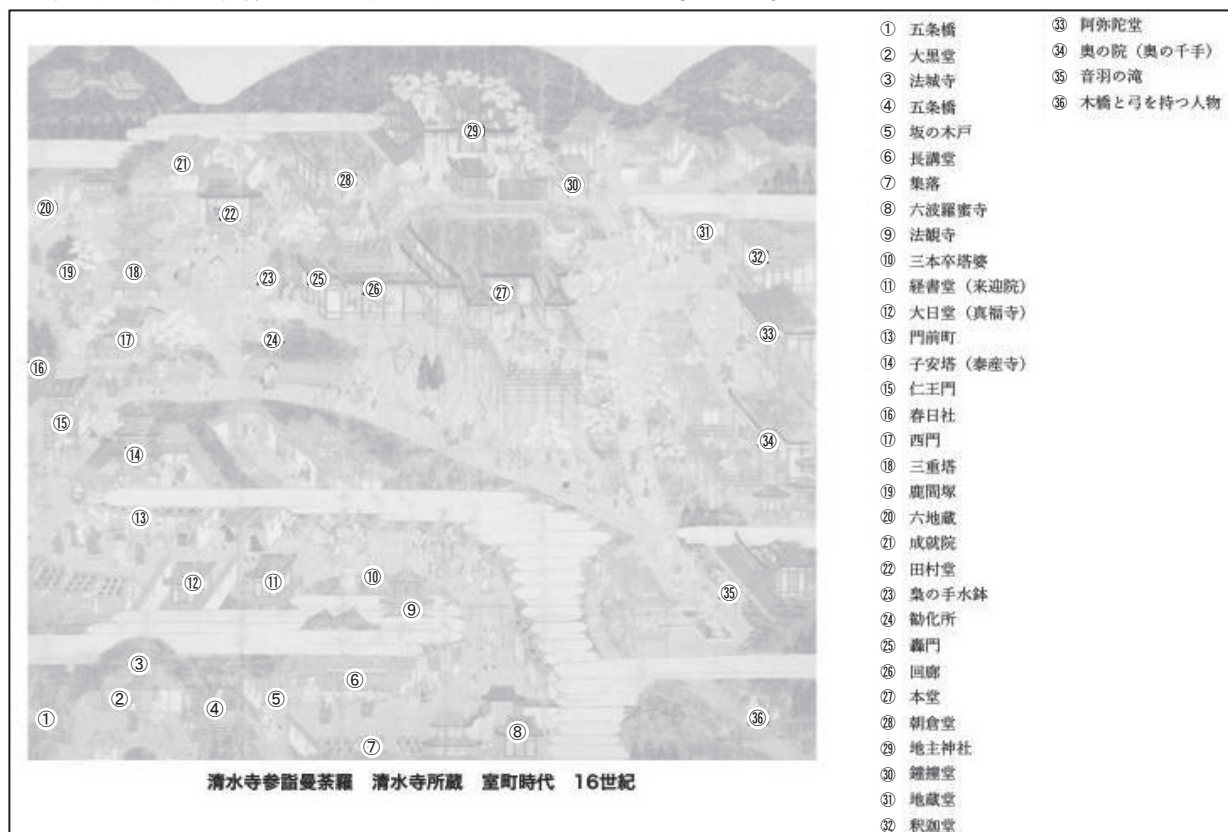


図1「清水寺参詣曼荼羅」読み解き図 【出典】清水寺所蔵の図に筆者加筆

3. 本研究における理論的枠組み

先に引用した論文で下坂が端的にまとめたように、この作品は参詣道を中心とする参詣空間と、清水寺を中心とする寺内空間に二分することが可能である。そしてその多くの場所では、対象となる名所・史跡には必ずといっていいほど居住者や参詣者が存在していて、生き生きと清水寺界限に躍動している。

この点こそ、本図が地域学習の教材として格好の素材であることを示している。そもそも本図は清水寺に所属

する僧侶（その多くが寺辺の居住者である可能性が高い）が地方に遠征し、清水寺とその周辺の名所や靈験を喧伝することを目的にして制作されたものである。いわば室町時代における清水寺案内書（ガイドブック）としての性格をもったものといえる。現代を生きる子どもが、あらためて現代の東山・清水寺界隈の地理・歴史・名所を知り、この作品と比較しながら新たな参詣曼荼羅を思考することは、地域資源を広く大きく発信していくことにつながる。いわば、この取り組みは室町時代に実践していた参詣曼荼羅を用いた東山文化の発信をそのまま現代においても実践する、という実践歴史学の側面も有しており、鑑賞主義に捉われないアクティブな文化財活用にもつながっていくものと考えられる。

Ⅲ. カリキュラム開発のプロセスと実施

1. 単元目標と展開の設計

地域の文化財「清水寺参詣曼荼羅」を生かした実践の構想にあたっては次のことを重視した。

まず、右に示した図2の左側は、学習者が考える理想の自分と現状の自分の間に存在する認知的・情動的ギャップを明示し、その解消を目的とした探究学習のプロセスを視覚化したものである。教育心理学において、このギャップは自己調整学習（self-regulated learning）の起点となり、学習動機の喚起や目標志向性の形成に寄与することが知られている（Zimmerman, 2002）。図2の左側上部の「理想の自分」は、学習者がなりたい自分の像（能力・態度・価値観）を、図下部の「今の自分」は、学習者の現時点での自分の像（知識、技能、態度）を示している。両者の間に生じる「ズレ」は、自己認知の差異を意味し、形成的評価やリフレクションを通じて可視化されることが有効であることがわかっている。図2の左側中央の「もの」「ひと」「こと」の三要素は、学習資源および学習環境の構成要素として機能する。「もの」は事物現象を指し、「ひと」は自分のまわりにいる他者（教師、専門家、友達など）を表し、「こと」は経験、出来事、一般的な認識を意味する。このモデルは、学習者が自己の現状を客観的に把握し、理想像との比較を通じて課題を設定し、それを探究的活動によって解決していくプロセスを構造化している。先行研究においても、実物資料を活用した学習や他者との協働的な探究は、批判的思考や自己効力感の向上に資することが報告されており（Hmelo-Silver et al, 2007）、本モデル図はそうした知見を統合的に反映したものである。したがって、図2左側は、自己不一致理論（Higgins, 1987）、社会文化的学習論（Vygotsky, 1978）、経験学習論（Dewey, 1938）などの理論的基盤に支えられた教育モデルとして位置づけられ、探究的・協働的学びの設計指針となり得ると考えられる。

こうした探究学習において、子どもが具体的な地域の文化財に触れ、過去から現在へのつながりを学ぶということは、地域の成り立ちや価値を理解し、「これからのまち」を創造していく土台となるだろう。具体的に、「100年後も住み続けられまち『東山』であるためには、どのようなまちであるとよいのか」について問いをおすなかで、スパイラルに探究学習が繰り返されるようにすることで、SDGsのゴール11「住み続けられるまちづくりを」にも関連する持続可能な地域の未来の姿について自分ごととして考えることへとつながると考えられる。

子どもたちの実態としては、年度当初に「自分たちのまちは好き？」と聞くと、「好き」と答える子どもが大半であった。自分の暮らすまちには愛着があるのである。だが、「清水寺について知っていること教えて」と尋ねてみても、「清水の舞台」「音羽の滝」という単語が出てくる程度であり、詳しいことは知らなかった。身近にあるのだが、あるのが当たり前で案外意識していない様子であった。また、校区には、清水寺以外にも数多くの神社仏閣が存在し、子どもたちにとっては遊び場であったり、毎日目にするところであったりするものの、知ってい

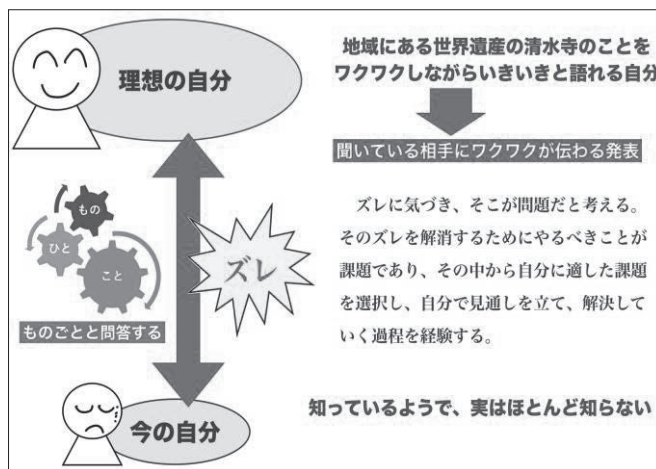


図2 探究学習のプロセス

【出典】筆者作成

ることは清水寺の場合と同じ状況であった。このことは図2の右下に示した。子どもたちは、これから何度も自分の育った地域のことを聞かれる場面に遭遇するであろう。そんな時に自分の育った地域のことを自分の言葉で生き生きと語れるようになってほしいと考えた。これらの実態を踏まえて、単元目標を次のように設定した。

【単元目標】100年後も住み続けられるまち「東山」の魅力を自分の言葉で語る。

本単元の導入にあたっては、まず、地域にある世界遺産の清水寺について、子どもが知っていることを確認し、「知っているつもりでも、実はほとんど知らない自分」に気づき、「地域にある清水寺について、ワクワクしながらいきいきと語れる自分になりたい」というめあてを子どもたちと設定した。

その後の展開としては、図3に示したように、まずは清水寺について調べ、その学びをもとに、身近にある地域の神社仏閣についても夏休みに個人で調査することにした。この2つの活動のなかで、子どもは習得した学び方を生かし、自分の興味に沿って探究をさらに深めていくことが予想される。また、いったん、ここまでの探究の成果を交流・比較する場（中間発表会）を設定することで、異なる視点や発見を取り入れ、視野を広げる。

その上で、地域の文化財「清水寺参詣曼荼羅」に触れ、昔の人々も地域の繁栄のために努力していたことを知る機会を設ける。そこから、自分たちもこれからの東山のまちの魅力や改善点を考えて「現代版清水寺参詣曼荼羅」を作成して100年後のまちにつないでいこうという学習の目的意識を育む。「現代版清水寺参詣曼荼羅」の作成に向けては、そもそも「誰にまちのことを発信するのか」という視点を持って、相手の思いを調べる必要もあることから、地域の住民や働く人々を対象とするアンケートや聞き取り調査を行っていく。そして、調査結果にもとづく現在のまちの状況と理想のまち像とを比較し、プ

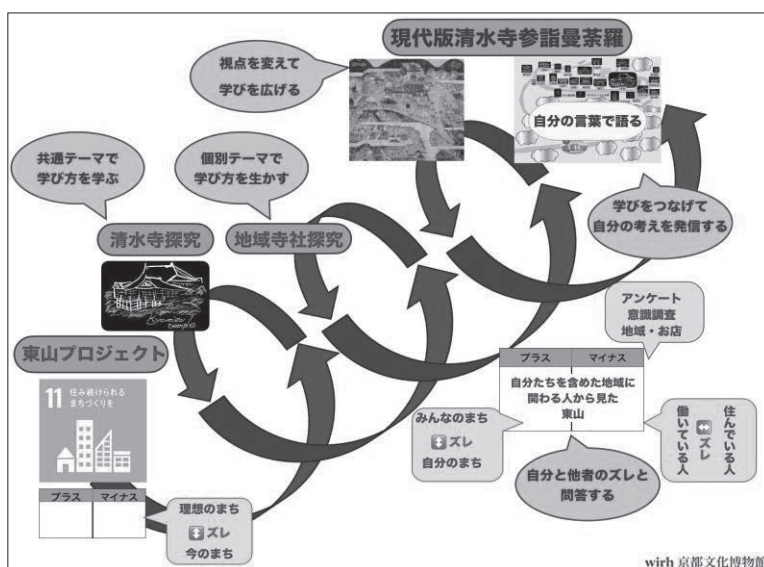


図3 単元「東山つなぐプラン」のスパイラルな展開【出典】筆者作成

ラス面・マイナス面を整理する。そのなかで、自分と他者、住民や働いている人々など、それぞれの立場による認識のズレに気づき、東山のまちが抱える課題や改善点を考えて、「東山つなぐプラン」の計画書を作成する。学習の成果は、全員で作成した計画書を「現代版清水寺曼荼羅」にまとめて共有、発信する。以上のように活動がつながり、スパイラルに学びを拡張、深化、統合させながら進めるという流れを構想した。

2. 地域学習としてのカリキュラム開発

地域学習の最大の利点は「自分たちのすぐそばにあるもの」を題材にできることである。目で見たり、耳で聞いたり、手で触れたり、五感を使って直接関わることができるため、子どもは直感的・感覚的なアプローチから学びを始めることができる。また、地域は一度きりの学びの場ではなく、必要があれば何度でも足を運び、繰り返し観察しなおすこともできる。その過程で生まれてくる小さな疑問は、探究の出発点となるだろう。

このように自分のなかから生じた疑問や関心をもとに出発する学びは、「なぜこれを学ぶのか」という目的意識を明確にし、学びを自分ごととして捉える姿勢を育むことにつながる。その結果、学習への意欲や関心が高まる。また、地域には自分自身とつながる人が多く存在する。たとえ子どもが直接知らないことでも、保護者や地域の人々とのつながりを通して学びを広げる可能性ももつ。子どもはこうした体験を通して、「自分は地域社会の一員である」という意識を育み、学びの実感だけでなく、実社会で求められる力（対話力・課題解決力など）も身につけていく。さらに、自分たちのまちを知ることで、子どもは「自分のまちをもっと良くしたい」と考えるようになる。このような学びは、地域への愛着や誇りを育み、将来的な地域貢献への意識の土台となると考えられる。

また、地域の課題に向き合う探究学習は、先述のようにSDGsへの関心や行動に向けた重要な入口にもなるだろう。子どもは自分たちの地域の課題を自分ごととして捉え、「地域の小さな担い手」として自分にできることを考え、発信し、行動する経験を積む。このような地域探究学習では、同じテーマのもと子ども一人ひとりが自身の興味・関心に応じて調べる対象や視点を選び、調査方法やまとめ方も自分なりに工夫できるため、個別最適な学びを実現しやすいという意義もある。共通のテーマを扱っていることから、他者との対話や協働が生まれ、他者の視点に触れるなかで思考を深化・拡張し統合できる良さがあり、他者理解を促進する可能性ももつ。

ただし、こうした学びを「総合的な学習の時間」に限定して進めるには時間的・内容的に限界がある。そこで本実践では、教科横断的なカリキュラムマネジメントの視点を重視して単元を構想している。たとえば国語科を中心に、算数科、社会科、図画工作科などとの関連性を意識しながら単元を設計し、教科で学んだ知識や技能を探究学習のなかで活用できるようにイメージした。これらの全体構造を単元「東山つなぐプラン」としてまとめたのが図4である。

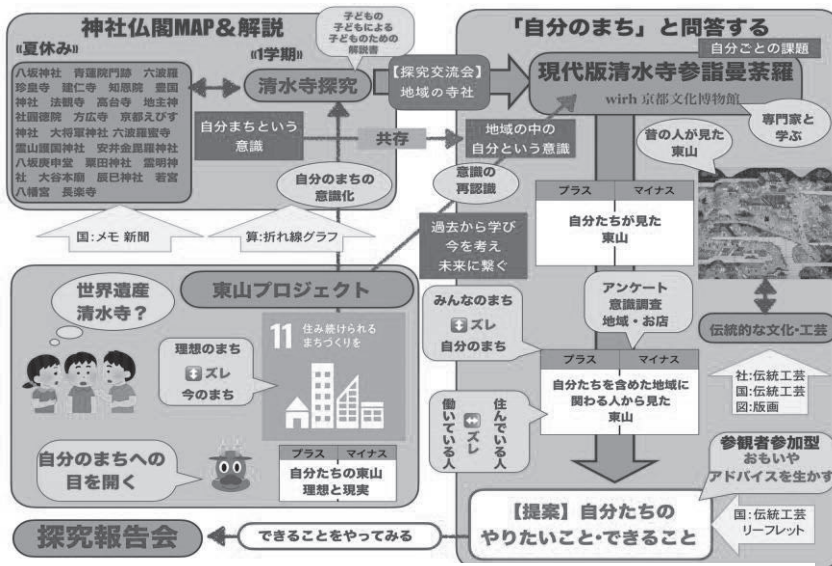


図4 単元「東山つなぐプラン」全体構造図 【出典】筆者作成

3. 博物館との連携体制の構築

博学連携については先述のように学習指導要領で推奨されているほか、博物館法の第2条・第3条においても学校教育の援助や学習機会の提供が規定されている。博物館の学芸員や研究員は、教材となる「もの」の専門家であり、その魅力や価値を多面的に理解している。一方、学校は学習者の成長と学びを支える専門家である。両者が協働して学びを創造することは、学習者にとって質の高い教材や学習機会を提供できるという点で大きな意義をもつ。たとえば、国立科学博物館のように、現職教員が博物館に専任として出向し、学校との橋渡し役を担う事例もある。しかし、多くの博物館では社会教育担当部署が兼務で対応しており、十分な体制を整えることが難しい状況にある。

ここで、博学連携が進まない要因を整理したのが図5である。博物館や動物園など社会教育施設の側では、人員や運営面での制約や時間的・立地的な制限がある。一方、学校側では、時間・制度・予算の制約に加え、教員の知識や経験不足といった問題がある。また、両者の間には文化や目的の違いがあり、連携の仕組みや中間的な支援体制が不十分であることも障壁となっている。これらの課題を解決し、連携を促進することにより、社会教育施設はその役割を強化でき、学校は教材理解を深め、授業の幅を広げることが可能となる。さらに、学習者は、本物の資料や現場に触れ、専門的な知識をもとに探究学習を進めることができる。そのため、博学連携を促進する仕組みづくりが求められる。

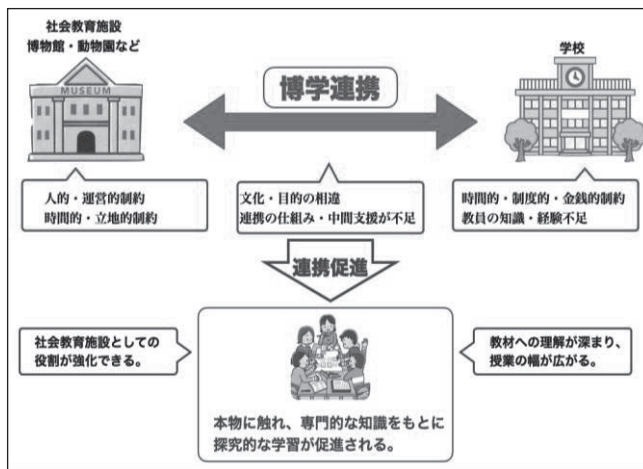


図5 博学連携の現状と促進 【出典】筆者作成

これらのことを踏まえて、本研究では次ページ図6に示す研究体制を整え実践していくこととした。学びの主

役は子どもである。そこで子どもを中心に置き、日々の活動を通して子どもの成長を支え、子どもや授業に関する専門家としての学校の教員と、実物資料や教材の内容に関する専門家として学びを支援する博物館の学芸員や研究員が連携するという関係に加えて、さらに教科や教育方法の専門家として、学習理論や教授法の知見をもつ大学教員も参画することにより、それぞれの専門性を活かしながら相互に連携して、子どもの学びを豊かにすることができると考えた。これら三者は、それぞれの知識や経験を相互に生かしあいながら双方向的に協力する。学校は博物館や大学から得られる知見や教材を授業に取り入れ、大学は学校現場のニーズを踏まえて理論や方法を発展させ、博物館は教育現場での活用を通して資料や展示の価値を高める。この循環的な連携によって、子どもは多面的かつ深い学びの機会を得ることができる。つまり、この図6は、「子どもの学び」を中心に据えた、学校・博物館・大学の三者が専門性を持ち寄り協働の関係性を示しており、教育の質の向上と探究学習の推進に向けたモデルとなると考えられる。

4. 授業実践の実際

実際の実践においては、先述のように、年度当初にほとんどの子どもが東山のまちについて実はよく知らないということに気づいた実態をもとにして、まず1学期は東山のまちの世界遺産であるが、地域でくらす子どもたちではあるが、知っているようで知らないことも多い清水寺を題材として学習を進めた。写真1のように、「清水寺探究」としてフィールドワークを何度も行い、疑問に思ったことを清水寺の方と問答しながら清水寺について知っていった。こうして清水寺についての理解を深めるなかで、東山にある他の寺社仏閣についても知りたいという子どもの思いを育むことにもつながった。そこで、夏休みには各自が東山のまちの寺社仏閣についての調べ学習を行った。

2学期は、夏休みに調べた内容を学年で共有するとともに、年度末に実施予定の学校全体の「探究交流会」に向けた中間発表会を実施し、自分が調べた寺社仏閣について、異学年である小学校3年生に発表した。発表のなかで、子どもは3年生も東山のまちについて知らないことが多いということに気づき、さらに自分たちのまちについて調べるだけでなく、より深く問答して、その成果を発信していく必要性を感じるようになった。

そこで、京都文化博物館の学芸員の意見を参考に、「清水寺参詣曼荼羅」を使った探究活動を進めていくこととした。学芸員とともに、室町時代に描かれた「清水寺参詣曼荼羅」の読み解きを行い、これまで学んできた現在の清水寺と過去の清水寺の様子の共通点を探すなかで、地域や文化財の価値を理解する学習を進めた。その様子が写真2である。子どもは、授業の導入部分で「清水寺参詣曼荼羅」を見ると、音羽の滝や三重の塔など実際にフィールドワークで学習したものを見つけ出した。しかし、「清水寺参詣曼荼羅」に描かれている重要な情報である建物や人物などは発見したものの、それが何を意味しているのか、どのようなつながりがあるのかについてはよくわからず疑問を持っていた。その疑問について、専門家の学芸員と対話しながら理解を深めていった。授業のまとめ部分では、「清水寺参詣曼荼羅」が当時の清水寺および周辺の地域の魅力を広く発信するために作られたということを知ることとなった。

この授業をもとに、子どもは今の自分たちの住むまちの魅力を発信するためには、今、東山のまちに住む人たちがどのような思いを持って暮らしているのかを知らなければいけないことに気付いた。こうした気づきから、子どもたちは自分で聞きたいことや調べたいことをもとに、アンケートの文言を考え、清水寺門前会や保護者に向けてアンケート調査を行った。その結果を見ると、自分たちのまちへの誇りなどプラス面が見えた一方、ゴミの多さや環境汚染のことなど、実際に住んだり働いたりしている人々だからこそ見えるマイナス面も浮き彫りと

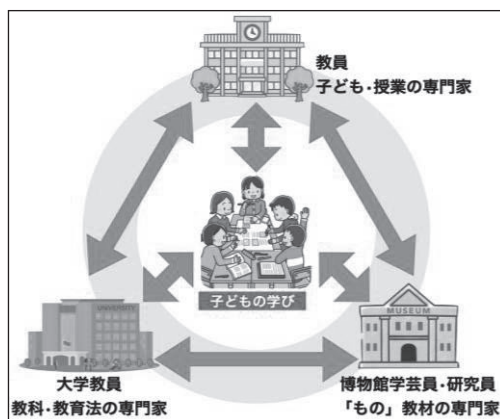


図6 子どもの学びを中心にした連携体制
【出典】筆者作成



写真1 清水寺探究



写真2 曼荼羅の読み解き

なった。こうして現在のまちの人々と対話することで、自分たちの理想とするまちとのズレを子どもは痛感し、100年後にも東山のにぎわいや魅力をつないでいくことができるよう、まちの魅力や改善点を「東山つなぐプラン」の計画書としてまとめ、地域に向けて発信したいという相手意識を持つようになった。そこで、学習のまとめとなる年度末の「探究交流会」や実際の地域の人々に対する発信を想定して、各自が考えた計画書をクラス全体でまとめて「現代版清水寺参詣曼荼羅」を作成しようという学習目標を明確にすることにつながった。

この学習目標の実現に向けて、まずは中間報告会を、京都市内外問わず多くの参観者が訪れる研究授業（公開研究発表会）のなかで行うこととした。中間報告会のねらいは、参観者や異なる内容を調べている友だちに対して、まず一度、発信してみることににより、意見を聴き合い、自分たちの発表内容（プランの計画書）をバージョンアップするというにおいた。当日の導入部分では、聴き合いのポイントについて図7を使いながら確認した後、交流していった。交流するなかで、子どもは、まちの魅力や改善点を伝えるための新しい視点を友だちだけ

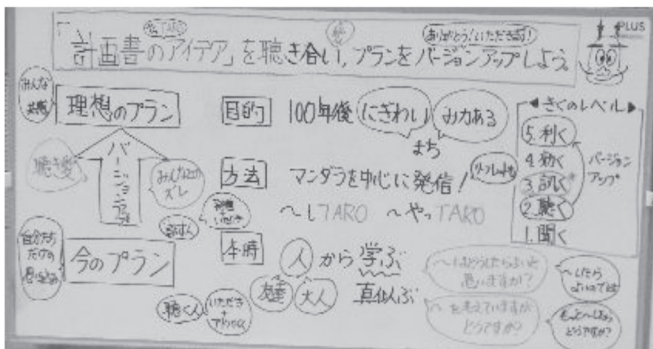


図7 中間報告会での聴き合いのポイント(板書)

だけではなく参観者、つまり大人とともに考えていった。そして、話し合ったポイントを付箋紙にキーワードとしてまとめることで、自分のプランの改善に生かしていった。この研究授業のまとめ部分では、京都文化博物館の学芸員が、以前の授業で室町時代の「清水寺参詣曼荼羅」を読み解くなかで「今と変わらないもの」を探したこととの関係について話をし、今回の学習で、これから100年後の東山のまちに残していけるものを自分たちが考えることの意義を学んだ。

中間報告会を通して再検討

した各自のプランの計画書(図8)は、クラスごとにタブレットでまとめて「現代版清水寺参詣曼荼羅」(図9)が完成した。これらをもとに、子どもは年度末の学校全体の「探究交流会」で他学年の子どもや教員への発信を行った。単元の振り返りにおいては、たとえば、「僕は曼



図8 プランの計画書の例

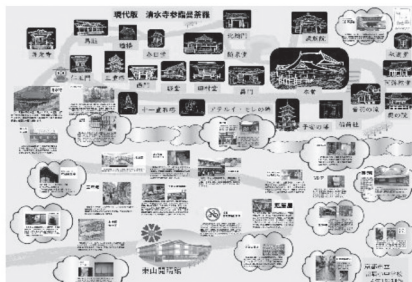


図9 完成した「現代版清水寺参詣曼荼羅」

茶羅を作る事によって清水坂のお店の事がよりわかるようになりました。清水寺をネットで調べるだけでなく、現地に行って話を聞くことも大切だなと思いました」という記述があったように、子どもは100年後のまちの人々に向けて曼荼羅を作成することの意義と地域のつながりを感じることができたものと考えられる。最終的に、完成した「現代版清水寺参詣曼荼羅」は、子どもがアンケートを行った清水寺門前会や保護者などを通して、実際の東山のまちの店頭等に掲示された。

IV. 実践の成果と課題

本実践の成果として、学校全体の「東山探究」(「総合的な学習の時間」)の研究テーマである「発信力」を高める5つの観点をもとに、子どもへの意識調査を行った結果を表したのが次ページ図10である。図10の項目ごとの結果を見ると、4年生の年度当初は5観点のうち4観点が8割を超えていたものの、発信する際の「相手意識」の観点がとくに低かったことがわかる。そこで今回、子どもが学びのなかで相手意識をもって発信できるような単元「東山つなぐプラン」を構想し実際に取り組んだことにより、単元終了後の5年生の初めには、相手意識への着目が2割近く上がったことがわかる。

このような学びの変容を促したものはいったい何だろうか。それこそ、まさに博学連携にもとづく地域教材の

活用ではないだろうか。清水寺や門前会などとあらかじめつながりがあったことも大きく、さらに、京都文化博物館の学芸員とともに地域の文化財「清水寺参詣曼荼羅」の読み解きを行ったことなどから、子どもは、授業の振り返りにおいて、たとえば「清水寺参詣曼荼羅は色々なことが読み取れるし、たくさんの発見があるから楽しい」という言葉にみられるように、学習への意欲を高めたり、「家族や近所の人に東山区の魅力は何かをアンケートしてまとめたい」、「清水寺は、地域の人などにとってどう思われているか聞きたい」という意見が出てきたように、授業における学びの方向性を自分たちの住む地域へと向けたりしていることがわかる。

こうしたつながりのなかで実際に清水寺門前会や保護者へアンケート調査を行ったことも、学習の成果を発表する相手への意識を育むことにつながったと考えられる。先述のように、門前会や保護者など、現在、東山のまちに実際に住んだり働いたりしている人々の意見を通して、まちのプラス面やマイナス面を理解することにより、子どもは当初予想していた自らの考えとのズレを意識することとなった。アンケート結果を受けた子どもの振り返りの文言（図11）に見られるように、東山のまち（「開晴校区」）をあまり好きではないという意見もあるとい

アンケート結果から見て

・家の人でかいせい校区がどちらかというあまり好きではない、と回答していて、そういう人たちのアンケートは「人に優しい」は低かったです。私は、どちらかというあまり好きではない人たちにかいせい校区の魅力をしてほしいです。例えば、「人に優しい」です。私たち4年生は清水道のお店にアンケートをした時に知らない相手だったのに、とても親切で私は改めて分かりました。大人たちはそういうことはしませんが、それにたことならできるとおもいます。そういうことをして、かいせい校区の人が「人に優しい」と、いうことが分かってほしいです。あと、ポスターなどもはってほしいと思いました。

図 11 アンケート結果を受けた子どもの振り返り

う実態が、逆に、まちの良さについてもっと知ってほしいから実際にポスターを作って貼りたいという思いを子どものなかに育んだといえる。子どもの考え出した「東山つなぐプラン」の計画書は、自分は地域のために何ができるのかという相手意識をもって作られたものであり、明確な目的意識のもとで作られたものである。また、「東山つなぐプラン」の計画書を作成する際には、実際に自分の家族の経営している店舗がまちの魅力の一つでもあると考えて、家族や親戚等に自らアンケートを行い、まとめていった子どもも多く見られた。こうした学びは保護者からも感謝されることとなり、将来のキャリア教育にまでつながる学びになったといえるだろう。

このように成果をみてもくると、博学連携と地域教材の活用は、学習を通して「誰に、何を」発信するのかという相手意識や目的意識を育むことにつながったと考えられる。さらに、このことは、本単元の導入部分で子どもと設定した「地域のことをワクワクしながらいきいきと語れる自分になりたい」というめあてを実現するための重要な糸口となったといえるのではないだろうか。

V. まとめと今後の展望

本研究では、博学連携にもとづき、地域の文化財である「清水寺参詣曼荼羅」を生かして探究学習のカリキュラムを子どもたちとつくりあげていった実践の様子について検討してきた。その結果、第一に、本物の文化財を生かした授業が相手意識を育み、子どもたちの探究学習を広げたり深めたりすることが浮き彫りとなった。第二に、今回の実践のように、まちの過去と現在、そして未来を子どもたちとつないでいくプランを計画・創造する実践は、一見すると地域の文化財が充実していないように思われる地域においても、まちの古い写真や古地図を生かしつつ、まち探検を行うことなどを通して応用することができるだろう。こうした応用可能性を実現してい

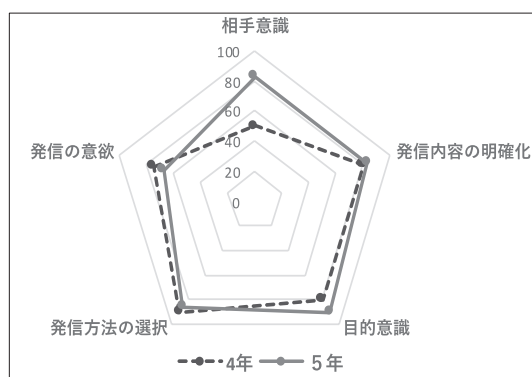


図 10 発信してつながる学びの5つの姿 (校内意識調査より)

くことは今後の課題としたい。

謝辞

実践にあたっては、清水寺の大西皓久氏、内田孝氏、清水寺門前会の皆様、保護者の皆様をはじめ、地域の多くの方々にご協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

附記

執筆の役割分担としては、Ⅰ平島・樋口、Ⅱ西山、Ⅲ平島・齋藤、Ⅳ齋藤・平島、Ⅴ全員が担当した。

参考文献

- Dewey, J. (1938). *Experience and education*. New York, NY: Macmillan.
- Higgins, E. T. (1987). Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94(3), 319-340. <https://doi.org/10.1037/0033-295X.94.3.319> (2025年9月10日確認)
- Hmelo-Silver, C. E., Duncan, R. G., & Chinn, C. A. (2007). Scaffolding and achievement in problem-based and inquiry learning: A response to Kirschner, Sweller, and Clark (2006). *Educational Psychologist*, 42(2), 99-107. <https://doi.org/10.1080/00461520701263368> (2025年9月10日確認)
- Vygotsky, L. S. (1978). *Mind in society: The development of higher psychological processes*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Zimmerman, B. J. (2002). Becoming a self-regulated learner: An overview. *Theory Into Practice*, 41(2), 64-70. <https://doi.org/10.1207/154304502753458703> (2025年9月10日確認)
- 阿部敬(2024)。「縄文給食を作る——総合学習プログラムの開発・実践からみえる博学連携ネットワークの機能」『十日町市博物館研究紀要』第3号、pp. 1-12.
- 上野友愛(2009)。「『清水寺参詣曼荼羅』の空間構成—〈塔〉が果たす役割」『絵解き研究』第22号、pp. 119-148.
- 小笠原喜康(2005)。「博学連携と博物館教育の今日的課題——近代学校の問題点を越えて」森茂岳雄編著『国立民族学博物館を活用した異文化理解教育のプログラム開発』国立民族学博物館調査報告第56号、pp. 281-307.
- 黒田日出男(1987)。「参詣曼荼羅と文芸——清水寺参詣曼荼羅の読解」『国文学 解釈と鑑賞』第52巻第9号、pp. 130-138.
- 下坂守(1991)。「参詣曼荼羅の空間構成——『清水寺参詣曼荼羅』を素材として」『京都国立博物館学叢』第13号、pp. 57-80.
- 下坂守(1993)。「参詣曼荼羅」『日本の美術』第331号、pp. 1-98.
- 田尻信壹(2016)。「博物館と学校カリキュラム」上羽陽子ほか編『調査報告学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』国立民族学博物館調査報告第138号、pp. 11-19.
- タリア アンドレイ(2018)。「勸進と中・近世日本の造形——清水寺参詣曼荼羅と伊勢参詣曼荼羅の研究」『國華』第123巻第7号、pp. 7-17, 3, 5.
- 西山克(1988)。「擬装の〈風景〉——清水寺参詣曼荼羅をテキストにして」『芸能』第30号第7巻、pp. 8-24.
- 野村遼平(2025)。「博物館が学校と連携して地域学習を行う意義について——博物館から見る博学連携」明治大学学芸員養成課程編『Museum study』第36号、pp. 37-48.
- 橋本祥夫・山下正己(2022)。「『地域再生』を意図した小学校歴史学習の開発——ふるさと学習『かめおか学』亀山城プランを事例に」日本教育実践方法学会『教育実践方法学研究』第7巻第1号、pp. 59-71.
- 日名地健斗・深谷圭助(2022)。「日本の博物館教育における学校連携の必要性に関する一考察——「日本の博物館総合調査」の分析を通して」中部大学『現代教育学研究紀要』第16号、pp. 77-84.
- 堀田龍也・高田浩二(2002)。「博物館をみんなの教室にするために——学校と博物館がいっしょに創る「総合的な学習の時間」」高陵社書店.
- 山崎準二・内田昌広(2002)。「地域博物館と学校教育の連携・融合についての一考察——総合的な学習への対応を中心として」『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第8号、pp. 135-146.